

CAS	67663
物質名	クロロホルム
IARC Vol. (発行年)	73 (1999年)
遺伝子傷害性に関する知見	<ul style="list-style-type: none"> ・ in vitro 試験系では、細菌を用いた試験で遺伝子突然変異を誘発し、真菌、酵母菌、哺乳動物細胞を用いた試験では弱い遺伝子傷害性を認めた。 ・ in vitro 試験系で弱い遺伝子傷害性を認めた。 ・ ヒトにおける知見については不十分な証拠しか得られなかった。
実験動物に関する知見	<p>評価：十分な証拠</p> <p>概要：マウスの経口投与及び吸入暴露実験の結果、尿細管の腫瘍、肝細胞の腫瘍の発生を認めた。また、ラットに経口投与した結果、細尿管の腫瘍の発生を認めた。</p>
ヒトに関する知見	<p>評価：不十分な証拠</p> <p>概要：本物質に関連して、塩素処理された飲料水の摂取量と発がんとの関係の疫学調査例が複数ある。調査結果において、膀胱、直腸などの腫瘍の過剰発生を認めたが、飲料水中の本物質以外の化学物質やその他の要因の影響を除いていないこと、男性と女性に対する影響が一致していないことから、発がんの原因を本物質と推論することが難しかった。</p>
評価結果	<p>上記のとおり、本物質は細菌を用いる試験では遺伝子突然変異を誘発したが、他の in vitro の試験系では弱い遺伝子傷害性を示すに留まり、ヒトに関する知見は不十分なものであった。</p>